

(五) 西苑にて

ウエスト・ガルテン

ジークフリード・キルヒアイスがその人物の存在に気付いたのは偶然だったが、気まぐれな運命のサイコロの手助けを借りなくとも、遅かれ早かれ彼女の存在に気付かないほどにキルヒアイスの神経は鈍っていなかった。たとえおよそ三ヶ月ぶりにアンネローゼを訪ねることへの期待が、胸の裡の半ばを覆っていたにしても。逆にアンネローゼの居館を訪れるからこそ、彼の犀利な目はいかなる変化も見逃すまいとして鋭敏さを増していたと言った方が正しい。

アンネローゼに会える嬉しさを表現する点では、キルヒアイスはラインハルトに遠く及ばない。新無憂宮の皇宮から西苑へ向かうラインハルトの足取りは、三〇〇〇隻の分艦隊と四〇万近い将兵を率いる帝国軍少将のそれとはとても思われなかった。

「ラインハルトさま、そんなに急ぐと転びますよ！」

見かねたキルヒアイスに注意され、憤然として反論しようと振り返った瞬間、ものの見事に両脚がバランスを失った。

「わ——」

「ラインハルトさま！」

キルヒアイスは慌てて駆け寄ろうとしたが、ラインハルトは上体を完璧にコントロールして失いかけたバランスを取り戻し、二歩三歩とたたらを踏んだだけで身体を立て直した。他者がやれば駆け出しのコメディアンさながらに無様極まりない動作を、洗練を極めた舞踏のような優雅さでやってのけるラインハルトだった。両手を腰に当てて、いわゆる仁王立ちになったラインハルトはキルヒアイスを睨み付けるポーズになる。

「お前が遅すぎるからいけないんだぞ」

「そんなにお急ぎにならなくても、アンネローゼさまがどこに行かれたりはしませんよ。転んで服に泥なんかつけていったら、かえってアンネローゼさまを心配させてしまいます」

「転ばなかったじゃないか」

子供っぽい反論が返ってきた。

「それに、一秒遅くなったら、姉上に会える時間が一秒短くなるんだ。お前はそれでもいいのか、キルヒアイス」

「いいえ。でも、本当に転んだりしたら、後始末で何分も無駄になりますから」

「そんな心配は、俺が本当に転んでからしろ」

半ばは照れ隠しだったのだろう。さすがにラインハルトも歩調を緩め、親友と肩を並べる。

「まだ伸びてるのか？」

その肩がすでに同じ高さにならないことに苦情を申し立てる金髪の親友に、キルヒアイスは本気で苦笑した。

「ええ、今、一八七センチです。あと二、三センチは伸びるでしょうね」

「そうか」

ラインハルトも、その身長はすでに一八〇センチを超えている。人並み外れた美貌と、陽光をはらめばプラチナ色の光を纏うかに見える金髪の豪奢さのゆえに、ラインハルトはしばしば『華奢な象牙人形』などという陰口の対象にされていた。実際には、その長身は強靱でしなやかな筋肉を備え、ひとたび激発すれば猛獣の獠牙と危険さを併せ備えている。

「どうして俺を置いてお前一人だけ背を伸ばすんだ？」

「どうしてでしょうか？ 牛乳を沢山飲んだからかも知れませんがね」

「俺が牛乳嫌いだって言うのか？」

「そうは言いませんけれど、どちらかと言えばホワイト・シチューやフリカツセの方が好きですよ。」

言いながら、キルヒアイスは、ラインハルトがいつも彼の髪でそうするようにラインハルトの金色の前髪をついと指先に絡め取る。何をするんだ、という抗議を無視して、それがピンと縦に立ち上がるようにくるくると振り回した。そうすると、やや癖の強いラインハルトの髪は束の間だけ、まるで彼の前額から生えた金色のアンテナのように立ち上がった、風になびいた。

「こうすると、全長約一八五センチですよ、ラインハルトさま」「キルヒアイス……！」

ラインハルトの声が剣呑な響きを帯びた。

「どこでそんな冗談を覚えてきたんだ？」

「即興ですよ。」

キルヒアイスは微笑って金髪の少年の怒りを受け流す。

「ラインハルトさまが背の差をあんまり気になさるからです。」

「そんな冗談、姉上の前でやるなよ。姉上はあんまり冗談というのがよく分らないから。」

それはラインハルトの方だ。キルヒアイスが知る限り、アンネローゼの方が弟よりも遥かにユーモアのセンスには恵まれているように思う。……反論は胸の裡だけに止めておくことにして、キルヒアイスは視線を転じる。すでに帝国軍少将ラインハルト・フォン・ミューゼル閣下とその副官キルヒアイス少佐の来訪の先触れが出ていらい。時たますれ違ふ西苑の雇員らしい人々が、彼らの行く小径から左右に外れて丁寧に頭を下げるのに、キルヒアイスは一々会釈で答える。ラインハルトは余り視線を向けないが、これは早く姉に会いたくて気が急いでいるだけで、無視しているわけではない。

ふと、キルヒアイスの視線が止まった。

「……ん？」

「どうした？」

「いえ……あの、ラインハルトさま。ちょっと先へ行ってくださいませんか？」

「何かあったのか？」

ラインハルトもキルヒアイスの視線を辿ったが、背の低い木立の作り出した涼しげな木陰に人影はなかった。

「ええ、ちょっと気にかかることが……後でお話しします。時間はこちらから思いますから。」

「俺も行こうか。」

「いえ、ラインハルトさまはアンネローゼさまの所へいらしてください。心配するほどのことはありませんが。」

キルヒアイスが笑顔を消すと、ラインハルトの目からも悪童めいた悪戯っぽさが拭い去られ、獲物を狩る獅子のそれに取って代わる。

「分かった。お前一人で無理をするな。」

「ええ。ここは新無憂宮の中です。」

騒ぎを起こせば、累はキルヒアイス一人のみならず、ラインハルトからアンネローゼにまで及ぶ。まだ、彼らは一介の少将とその副官というに過ぎず、かつ、一八歳で将官にまで上り詰めたラインハルトへ向けられる嫉視は急速にその度合いを強めている。一歩どころか半歩でもステップを間違えば、彼らを敵視する勢力は直ちにその圧力を強めてくるに違いなかった。

領き、もう迷いのかけらも見せぬ歩調へ姉の居館へと足を向けたラインハルトの背を見送り、キルヒアイスはやにわに駆け出した。

「お待ち下さい」

キルヒアイスが第一声を放ったのは絶妙のタイミングだった。自身、白兵戦技の達人である彼にとつて、あと半歩がいわゆる一步の間であることは自明だった。すなわち、トマホークの一閃、あるいは戦闘ナイフの刺突が相手の死命を制するぎりぎりの距離、「ご用でしょうか？」

案の定だった。不意を打たれた様子のかからも見せず、相手はくるりと振り向く。右足を軸に、エルフを思わせる身軽な身のこなしで身体を一八〇度回転させたのだ。身体を回し終えると、四分の一步を退き、間合いを開いている。

この女性と会った記憶はただの一度で、それも一〇分に足りない短い時間だった。かつ、その時は貧しい平民の女学生なみに全くの飾り気のない服装だったし、ろくに化粧らしい化粧もしていなかった。

今、目の前に立つ女性の容姿は新無憂宮の後宮に務めるに相応しく華麗だった。金茶の髪は綺麗に結い上げられ、端正な細面には洗練された薄化粧が施されている。事務官らしいスーツすらも宮廷の風景に違和感をもたらないレベルの装飾を排除してはいなかった。

「なんだあれは、ごてごてして悪趣味だな」

ラインハルトにかかるとあっさりそう切り捨てられる過剰な装飾が、この女性に纏われると美麗とか華麗とかいう形容詞を冠したくなるのは不思議なほどだった。無論、キルヒアイスには大いに留保するところがあつて、アンネローゼ以外の女性をそのような言葉をもって形容すること、それ自体がアンネローゼへの、ひいてはラインハルトへの背信行為のように思われるのだ。

エメラルド・グリーンの瞳が、危険な金色の煌めきを帯びてキルヒアイスを見上げた。

「ジークフリード・キルヒアイス……少佐ですわね。どのような用件でしょうか」

「何をしておいでですか、シュミットバウアー男爵夫人、ここ
フライヘーレン・フォン・シュミットバウアー
で？」

久闊を叙する言葉は無論、最小限度の儀礼すらキルヒアイスは省略する。らしからぬことだったが、もとよりこの人物に対して再会を喜ぶ気分を持てようはずがないことも事実だった。

「西苑付き女官長補佐を務めております。職務は、グリュネワルト伯爵夫人を初めとする、西苑の貴婦人方の公的スケジュールの調整とその準備ですわ、キルヒアイス少佐」

「わたしが訊きたいのは、あなたが何を意図してここにおられるか、です」

「意図？」

シュミットバウアー男爵夫人：コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアーは艶やかなほどの微笑を浮かべた。華やかな微笑が表情を消し、その端麗な容貌は能面めいて空白だった。約半年前、ヴァンフリード宙域での戦いでラインハルトの乗艦を庇つて負傷・入院していたヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー准将を、彼ら二人は軍病院に見舞った。その席上、ヨハン・クレメンツは突如ラインハルトへの糾弾の言葉と共に銃を突きつけたのだ。

「ラインハルト・フォン・ミューゼル、帝室に叛意を抱く逆臣として誅殺する！」

その言葉は未だに生々しい鮮やかさでキルヒアイスの耳の奥に焼き付いていた。ラインハルトが間髪を容れず射線をかわした直後、キルヒアイスの放った一撃がヨハン・クレメンツの生命を奪った。だが、コルネリア・ゲルトルーデが、その手にファイバー・グラス製のナイフを閃かしたのはその直後だった。

「意図も何も：シュミットバウアー男爵家の当主と言えども、職がなければ食べては行けません。男爵家の継嗣は認めて頂き、帝国軍大佐の地位も頂きましたけれど、それだけでは男爵家の体面も守れはしませんもの」

「あなたの兄上に対して、わたしはお気の毒なことをした、とは思っていません」

「コルネリア・ゲルトルーデの言葉を韜晦と受け取って、キルヒアイスは敢えて挑発的な口調で言い切った。

「わたくしも兄のしたことが誤ったことだったとは思っていません」

アルトよりも心持ち高い硬質な声は表情と裏腹に、ラインハルトとキルヒアイスへの敵意を隠していなかった。エメラルド・グリーンの瞳が刺すような金色の光を閃かせ、キルヒアイスの青い目が正面からそれを受け止める。

「シュミットバウアー男爵家は、ゴルデンバウム帝室に絶対の忠誠を誓う家柄です。兄があなたがたを危険な存在と見たならば、実際、あなたがたは危険なのだと思います」

「——では？」

「ですが、西苑女官長房の職は皇帝陛下のお声掛けで任じられたものです。わたくしが希望して就いたわけではありませんわ」

「皇帝陛下の？」

「ええ。皇帝陛下直々にお言葉を賜りました。グリーニューベルト伯爵夫人のお側近く仕えるように、と」

「あなた個人の意図は何もない、と？」

「ありませんわ」

「誓って？」

「何に誓うのでしょうか？」

淡く彩られた唇が辛辣な微笑に緩んだ。

「臣下の身で皇帝陛下の御名に誓うことなど不遜を極めたことです。兄にヴァルハラへの門をくぐらせた当の本人に向かって、兄の名に誓ってみせたところで茶番でしかありませんし、それとも神に誓って見せましょうか？」

「あなた自身の、シュミットバウアー男爵夫人として矜持に賭けて」

「お断りします」

「にべもなかった。

「あなたがそのような誓いを強いられる謂われはありません。あなたはグリーニューベルト伯爵夫人をどのように大切に思いなのかは知っています。しかし、それ故に、わたしが伯爵夫人への害意を抱いていないことを、あなたに誓ってみせる義務などどこにもありません。違いますか？それとも交換条件として、あなた方に皇帝陛下への終生の忠誠を誓うよう、お願いしたら、そう誓ってくださいでしょうかしら？」

「：誓いますよ、無論」

「その誓いが真実のものとどうやって保証するのでしょうかしら」

辛辣な微笑が更に剃刀に似た白い光を帯びた。

「キルヒアイスはこれ以上の問答が無益であることを悟った。

「わかりました、男爵夫人。ただ、あなたがここにいらっしゃることはミューゼル少将とグリーニューベルト伯爵夫人にはお話しします」

「伯爵夫人にはもう何度もお会いしています。でなければわたしの職務は果たされませんから」

「もう、お会いになった？」

僅かに虚を突かれた思いだったが、確かにコルネリア・ゲルトルーデの言うとおりだった。彼女はアンネローゼの公式行事のス

ケジュールをとりまとめ、その準備の差配に当たっている。その彼女がアンネローゼと会っていないはずはなかったし、さらにアンネローゼが彼女の身辺近くに侍する人物の素性に無関心でいるというのも考えにくいことだったのだ。

やや顔色を改め、キルヒアイスは問うてみることにした。グリーネワルト伯爵夫人をどう思ったか、伯爵夫人からは身の上について何か聞かれなかったのか、と。

「美しい方ですね。同性のわたくしから見ても、あのような方を姉に持ちたいと思いましたし、殿方であれば配偶者としての理想をあなたに重ねて見るかも知れませんか」

「あなたも伯爵夫人と同じ頃に後宮へのお召しを受けられていた。そう聞きました」

一瞬、エメラルド・グリーンの両目が吃驚するほど大きく見開かれ、キルヒアイスの一言が奇襲となつて彼女のガードを突き抜けたことを知らせた。

「どうしてそれを？」

「リーフェンシュタール子爵閣下から伺いました」

「ヴィンフリートから……」

図らずもという調子で、その名がコルネリア・ゲルトルーデの唇からこぼれ落ちる。

「子爵は感謝する、と仰つたそうです」

ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールは詳しく語つたわけではない。当時、まだ一五歳の幼年学校の一生徒でしかなかったラインハルトに、彼はただ『感謝する』と言っただけだった。

「感謝……する？」

金茶色の髪が左右に緩やかに揺れた。きつく張りつめていた眸の光が柔らくなり、硬質なラインを描いていた頬の線が微笑む

形に動く。

「ほんの少し順序が入れ替わってれば、今、あちらの——」
アンネローゼの館を漠然と指し示した。

「あの館にいるのはわたくしで、ここであなたと話しているのが伯爵夫人だった。ヴィンフリート卿はそう仰つたのでしょうか？」

キルヒアイスが答えるのを、コルネリア・ゲルトルーデは待たなかった。それは違ふ。自分が先に後宮に入つていたとしても、いづれ皇帝陛下は伯爵夫人を見いだされていたに違いない。

「その時、わたしは他の館にあつて伯爵夫人に嫉妬の焰を燃やしている方々の一人に入つていただけでしょうか——」ええ、もちろん、このお話しも伯爵夫人にはさせて頂きました」

「伯爵夫人は……何と？」

「微笑つて、そんなことはないでしょう、と……優しい方ですね。上辺だけでなくて、本当に優しい方。本心からそう言われているのが分かりましたから」

つと居住まいを正し、コルネリア・ゲルトルーデは表情を改めた。一瞬だけ見せた穏やかさが、もとの事務的な、硬質な表情に取つて代わつた。

「わたくしは皇帝陛下より、伯爵夫人をお守りするようにと命ぜられました。シュミットバウアー男爵家の矜持に賭けて、陛下からのご命令を全うするつもりでいます。あなた方が、わたくしの言葉を信じようと、信じまいと……です。では、仕事がありますので。伯爵夫人がお待ちかねですね。お知らせに行つた時から」

「男爵夫人！」

「ご武運をお祈りしております、キルヒアイス少佐。ただ、次回からは多少、年長者への敬意を示して頂けると嬉しいですね。ご存じでしょうけれど、わたしは伯爵夫人とは同い年ですし、帝国

軍からは大佐の階級を拝命している身でもありますから…ね」
「失礼しました」

キルヒアイスの微笑みも、コルネリア・ゲルトルーデのそれに劣らず辛辣だった。

「気を付けます…あなたが年長者として敬意に足る方であることを期待して、ですが」

返答はなかった。彼女が長身を翻した後、金茶の光の帯が白刃の閃きに似てキルヒアイスの網膜に長い残像の尾を引いた。

「シュミットバウアー男爵夫人だって？」

弾みで卓上のコーヒーマップが大きく揺れ、こぼれたコーヒーマップが白いクロスに褐色の染みを広げた。

「ラインハルト…？」

さすがに眉を顰めたアンネローゼが声をかけ、ラインハルトは一瞬に顔面に駆け上がった血流を、爆発寸前で辛うじて押しとどめた。

「ええ、女官長補佐という立場で、西苑に勤めておられます」

確認する視線をアンネローゼに向け、キルヒアイスは首をかしげた。穏やかに頷き、コルネリア・ゲルトルーデとすでに何度も会って言葉を交わしていることを説明してくれるはずのアンネローゼが、ふと視線を泳がせたからだ。

一瞬、聞き損ねたのかと思った。まさかアンネローゼが彼の視線を避ける仕草をしようとは思わなかったから。

「そ…うね。一月ほど前に、挨拶に来られて…今日も、あなた方が来る前に先触れの知らせを持ってきて頂いたのよ。ラインハルト、シュミットバウアー男爵夫人がどうかして？」

「いえ…」

ラインハルトもさすがに表情の選択に窮いたらしい。キルヒア

イスを横目で見たやや非難がましい視線が、『姉上に話す前にどうして俺に一言言っておかないんだ』と訴えていたから、キルヒアイスはアンネローゼの様子に深くは注意を払っている余裕を与えられなかった。

確かにシュミットバウアー男爵夫人との確執…というが経緯と言った方がよいが…について、アンネローゼは何も知る立場にない。また、ラインハルトも姉に無用の心理的負担を負わせる意思は全くなかったから、アンネローゼの前でシュミットバウアーの名前がかけても語られることはこれまでなかったことなのである。

「それで姉上、女官長補佐とはいつも一対一で会われるのですか？」

「そうね、一対一でということとはなかったわ。いつも、女官長のところの職員を連れて見えるわ。公私の別がとても厳格な人なの。二人きりだと、私に私事わたくしごとを頼んだりしてないという証拠が残らないからと仰るのよ」

「そうですか…」

安堵はできない…ラインハルトがそう思っているのは確実だった。互角とは言わぬまでも、コルネリア・ゲルトルーデがキルヒアイスにも比肩する白兵戦技の達人だと言うことを、彼らは知っている。万一にも彼女がアンネローゼに害意を抱いていれば、傍に女官長府の職員風情が何人いようと、人形以下の邪魔にすらならないだろう。

ここですぐに対策が打てると言うものではないが、可能な限り早く何らかの策を講じる必要がある。

ラインハルトからの目配せを了解し、話題を転じようとして、再びキルヒアイスは視野の中を疑問符が滑り落ちていくのを感じた。横顔に視線を感じて振り向いた先で、アンネローゼがふと視

線を逸らした動作が不自然だった。すくなくともアンネローゼらしい挙措として彼が知っているそれとは明らかに異なっていた。

一度意識し始めると、アンネローゼの笑顔の中にも、なにかぎこちない、戸惑ったような濁りが感じられた。濁りといえるほどの不透明さではないにしても、傷一つないと信じていた宝石の澄明さの中に、ほんの微かな瑕疵のようなものが見えたような気がして、キルヒアイスをひどく落ち着かなくさせた。

何度か、直接に疑問をぶつけてみようか、と思った。どうなさったのですか、顔色が優れないようにみえますけれど……と。

キルヒアイスがそれをしなかったのは、彼らに与えられた時間の短さだった。出征を前にして僅かに半日。それが、ラインハルトにとっては姉に、キルヒアイスにとっては一〇歳のあの日から心の奥深くに住まわせた女と直に会うことを許された時間のすべてだったのだ。互いの無事と健康と、あの日々から変わらぬ自分たちを確認する時間ですら十分ではない。気のせいかも知れない懸念を口にして、ほんの僅かな、宝石にも代えがたい時間を気まぐさと不安の泥水の中に投げ込むことなど、できることではなかった。

日が大きく西へ傾き、居館の前の泉水も赤みを帯び始めた頃、皇帝来訪の先触れの使者が着いて、彼らに至福の時の終わりを告げた。

「ジーク……」

名残惜しさが尾を引くのを嫌うラインハルトは、辞去するときにはいつも先に立って館を出る。この日もそうだったから、アンネローゼがキルヒアイスを呼び止めた声はラインハルトの耳には届いていなかった。

「はい？」

振り返る。七年前は憧れの目で見上げた女の姿は、いつの頃から

らか視野の低い位置に移っていた。

「……」

心臓が躍ったのは、アンネローゼの表情がいつになく哀しげで透き通るように見えたからだだった。その印象は、キルヒアイスに不安を催させた。このままアンネローゼがどこかへ消えてしまうのではないか、という。

「ラインハルトさまのことはジークにお任せ下さい。きっと、今度もご無事で、大きな武勲を立ててお帰りになります」

「ええ、ラインハルトのことをお願い……それと……」

「それと？」

「あなた自身のこと。ラインハルトだけではなくてよ、ジーク。あなたも無事に帰ってきてくれないと、ラインハルトを導いてやれる人がいなくなってしまうから」

嬉しくなかったと言えば嘘だった。これまで、アンネローゼがキルヒアイス自身の安危への懸念をこれほどはっきり口にしたことはなかった。

その手をとって口づけする騎士の礼への衝動を抑えかねたが、間もなく皇帝を出迎える寵妃にむかつてのそれは、邪推やそれに伴う糾弾を受ける恐れが余りにも大きすぎた。

「心します、アンネローゼさま」

最敬礼し、ちょっと苛立たしそに彼を待つラインハルトを追う。

「……？」

ラインハルトと肩を並べた時、キルヒアイスは背と横顔に視線を感じて足を止めた。

背の視線は分かっていた。アンネローゼは、彼らの姿が視界から消えるまで、彼らを見送ってくれるのが普通だった。が、横顔

への視線は――

視線の主を探し当てたとき、キルヒアイスはそつとラインハルトの肘を引いた。

「何だ？」

「あれを――」

数メートルを隔てて、ラインハルトに言わせれば『悪趣味な』スーツ姿の、長身の女性がそこに佇んでいた。

「シュミットバウアー男爵夫人です」

「あいつか……」

見られただろうが、キルヒアイスは危惧した。館の出口で、アンネローゼから声をかけられたあのシーンを。いささかの疚しさもないと信じてはいたが、コルネリア・ゲルトルーデに悪意があれば、どのような悪意に満ちた捏造でも、それを制約できるのは人の創造力の限界があるのみに違いないのだから。

だが、意外さは、嘲笑、あるいは嘲弄に類する色合いを期待したエメラルド・グリンの目の中にそれらを見いだせなかったことだった。突き込まれる蒼氷色の視線の槍すら、その目は何の敵意もなく受け止め、さりげなくその鋭鋒をいなしめているかにさえ見えたのである。

「おかしなやつだな」

ラインハルトもまた、それを察したらしかった。

「……姉上をいますぐどうこうしようという気はないらしいな。それだけは分かる」

「では？」

「今、一つ策を思いついた。俺に任せておいてくれないか、キルヒアイス？」

さては……胸裡で理解の泡が弾け、キルヒアイスは小さくうなずいた。

「ラインハルトさまがそう仰るなら、異論はありません」

ラインハルトたちはこの一日足らず後、八月二〇日に帝都を発ち、イゼルローンへ向かう。

キルヒアイスにしてみると、アンネローゼの様子が気にならぬでもなかった。アンネローゼの笑顔を指して『木漏れ日のよう』と表現するのは、彼らの名がいずれも故人の列に加えられて後の伝記作家たちだが、この時のキルヒアイスがその表現を知っていたら、『木漏れ日が通り雨で翳ったよう』と言ひ換えただろう。あるいはどこか身体具合でも悪いのではないだろうかと思案してみるのが、さりとて彼自身は医師でもなく、アンネローゼに医師の診断を受けるように忠告できる立場でもない。また、あるいは自分の気のせいではないかという思いも強く、ラインハルトに相談するというわけにもいかなかった。

すでに少将の地位を獲得し、軍部での最高位まであと四つの階梯を残すのみとなったラインハルトの行く手を阻もうとする三位一体の敵……軍上層部、門閥貴族、後宮の有力者……からの反感と敵意は幾何級数的にその水位を上げつつある。特に、ラインハルトが蛇デイトン・シン・ラフ夫、人と呼んで忌み嫌っているバーネミュンデ侯爵夫人からの嫉視と敵意はすでに単に煩わしいと言っただけの水準をはるかに上回り、その攻撃は物理的な手段を伴い始めていたのだ。侯爵夫人の害意は一人ラインハルトのみならず、アンネローゼをもその視界に収めていることは明らかだった。

いずれにしても、シュミットバウアー男爵夫人の存在は、アンネローゼにとつての潜在的な危険要素には違いなかった。バーネミュンデ侯爵夫人は明確な敵だったが、まだその手はアンネローゼの身辺には及んでいない。が、シュミットバウアー男爵夫人はアンネローゼと日常に接することのできる位置にあり、直接的な

危険さでは蛇夫人の比ではなかった。

新無憂宮から帰ってすぐ、ラインハルトはキルヒアイスをも連れずに外出した。その直前にキルヒアイスがアポイントメントをとったのはリーフェンシュタール子爵ヴィンフリートだった。

「ヴィンフリート卿から男爵夫人の行動を制約して頂くわけですか？」

「そうだ。俺たちがなんと言おうとも聞き入れるような相手じゃないだろ？」

気は進まないが、とラインハルトが付け加えた理由も、キルヒアイスはすぐに察しが付いた。ラインハルトの本領は大艦隊を率いての艦隊決戦にこそある。一度は肩を並べて戦い、その力量に敬意を払った人物の親族を相手に、謀略とも言えぬほどの策を巡らすのはラインハルトの気質に合わぬことおびただしかった。政争や宮廷闘争も、相手がブラウンシュヴァイク公のような門閥貴族そのものならともかく、である。

しかし、これはやらねばならぬことだった。

ラインハルトの外出は意外に長くかかり、リンベルクシュトラッセの下宿に彼が戻ってきたのは、その日も深夜になってからだった。

「姉上のことは、ヴィンフリート卿に確約を買ってきた」

開口一番、出迎えたキルヒアイスにむかってラインハルトが口にしたのがその言葉だった。白哲にやや疲労の色が濃いのは交渉が難航したからか、と危惧するキルヒアイスに、ラインハルトは黄金色の頭を左右に振って見せた。

「その話はすぐ終わった」

リーフェンシュタール子爵自身、宮廷付き武官として皇帝に近侍することが決まっているという。宮廷付き武官ならば、西苑付き女官長府ともごく近い位置にある。

「やつと俺の許へ戻ってきてくれたゲルタ（コルネリア・ゲルトルーデの愛称）をそうそう簡単に手放すわけにはいかんのでね。ましてやゲルタに無意味な人殺しなど、絶対にさせたくはない。卿の依頼は、俺の個人的な利害とも一致するのでね。無条件に引き受けさせて貰う」

それがヴィンフリートからの回答だったと聞き、キルヒアイスは苦笑を禁じ得なかった。

「ただ、どうも、苦手だな。あの、リーフェンシュタール子爵という人物は……」

「信用できない、とおっしゃるのですか？」

「信用はできる。いったん、子爵が諾と言え、それは決定的に諾だ。途中で否に言葉^{ナイン}を翻すような男ではない。ただ、あの人物に諾と言わせるのが骨だ」

それでキルヒアイスには分かってしまった。

次回の戦いで戦功を上げれば、ラインハルトの地位は中将に上り、一個制式艦隊の指揮を委ねられることは確実である。現在三〇〇隻、四〇万人ほどの部下の数は一気に一万数千隻、百数十万人に増加する。艦隊参謀長を初めとして、幕僚団と分艦隊司令官、およびその麾下の分艦隊幕僚など、ラインハルトの手足となつて動く人材の集団がどうしても必要となってくる。

准将として複数の艦を指揮する立場に立つ前から、彼らは貪婪な人材収集の目を働かせ始めていた。決して厚くはないが、帝国軍の人的資源の精華と称すべきリストを作り上げたと自負する彼らだった。

リーフェンシュタール子爵ヴィンフリートは、リストのトップ近く、『帝国の双壁』ウォルフガング・ミッターマイヤー、オスカール・フォン・ロイエンタールの両少将のすぐ下に並んでいたの

である。昨年以來、ラインハルト自身が何度もヴァンフリートとはコンタクトを続けているのも、そのためだった。まだあからさまな言葉にできる段階ではなく、慎重に言葉を選んでの会談となることが多いのと、明らかにこのよつなやりとりではヴァンフリートの方に一日の長があつたためだろう。戦場では疲れを見せぬラインハルトが、ヴァンフリートとの会見のあとは微かな疲労の色を滲ませていたことが多かった。

「こつちもはつきりしたことを言うわけにも行かないからな。そのせいかもしれないが、いざというときに彼が敵に回るのか、味方につくのか見当がつかないんだ」

「もう少し、時を待たれてはどうですか」

「ああ、そつだな。どうも腹を探り合うような話ばかりして、胃がもたれて仕方がない。直に話せる機会を待つか。俺が大将くらいになれば、人事局と直接掛け合うという手もあるからな」

他者が言えば途方もないホラ話に聞こえそうな内容も、ラインハルトの口から出ると単に確実な予定を述べただけにしか聞こえないのが不思議だった。普通、大将の地位を獲得できるのは少将数十人の内の一人であり、その地位を得るまでの期間は、平時であれば軽く一〇年を要するのだ。

「あと少しのご辛抱です、ラインハルトさま」

そういう表現で、キルヒアイスはラインハルトへの同意を示した。

「ラインハルトさまが大将の地位を手にお入れになるまで、あと一年を必要とはされないでしょう」

これも余人が口にするには嫌み極まりない追従以外のなにものでもなかったが、キルヒアイスにとっては決定済みの事実を口にしたに過ぎない。

「ああ、そつだな」

「では、未来の大将閣下にお願ひします」
「ん？」

「こちらの書類に目をお通し下さい」

黄金色の覇気に包まれているかに見えたラインハルトの表情が苦笑に溶けた。彼が出征前の分艦隊司令官として費やすべき時間を、姉の安全と彼の未来の幕僚団の人材を確保するために振り向けたツケが、分厚い書類の形をしてキルヒアイスの手の中にあつた。

「これは……徹夜だな」

苦笑はしたが、なさねばならない義務に背を向けたことのないラインハルトでもあつた。

「ええ、フーバー夫人に夜食とたつぷりのコーヒーをお願いしておきました。食事は済ませてこられたのでしょうか？」

「こいつ、微笑いながら言うんじゃない！」

「副官は、司令官がおやすみにならなければ眠れませんから。何日でもおつきあい致しますよ、ラインハルトさま」

「戦場で居眠りしない程度にしておけよ」

「ラインハルトさまも、お願いします」

そう言つて右掌を打ち合わせて笑つ。互いがいる限り、自分たちには不可能な事象がこの地表にも、宇宙にも現れてくるはずはない。この時の彼らにとつて、それは真実以上の真実以外の何ものでもなかった。

そして、ラインハルトは正しかった。

同盟軍の第六次イゼルローン要塞攻略戦を経て、翌年二月のティアマト宙域会戦まで連戦を重ねた彼らが、それぞれに大将と中佐の階級を得てアンネローゼに再会するのは四八六年三月。ほぼ七ヶ月の後のことである。その直後、クロプシュトゥック侯事件において帝国の双壁の知遇を得、さらにペーネミュンデ侯爵夫人

の自裁にラインハルトが立ち会ったのが五月二十八日。その二ヶ月後
ラインハルトは再び艦隊を率いてティアマト宙域への征途へ上る
ことになる。